朝鮮王朝陶磁と日本の茶文化

（これは、2007 年 10 月 26 日に韓国全羅南道宝城郡で行われた＜宝城粉引と茶文化＞をめぐるシンポジウムの資料です。韓国の人たちに日本の茶文化を理解していただくために、当日の報告は、韓国語のパワーポイントを使用して行われました。）

１　茶の伝播

喫茶の文化は、中国に始まり、次第に韓半島、ヴェトナム、日本などに伝播したものと考えられます。中国雲南省の西双版納（シーサンパンナ）には、茶の原木と見られる大木がいくつも見られます。

図１　茶樹王と呼ばれる原木

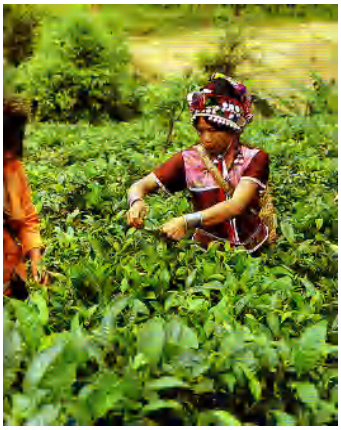


図２　現在の茶摘風景

喫茶についての最初の確実な記録は、8世紀に中国の陸羽（727-804年？）の著した『茶経』です。『茶経』には、茶の植物的な特性、製造法、飲み方、効用などが詳しく書かれています。『茶経』の時代に中国の人たちが愛飲していたのは現在では団茶と呼ばれる固形茶であったものと思われます。

図３　様々な団茶

図４　陸羽

中国では、さらに1987年になって、西安の法門寺の地下宮から874年以前に使用されていた茶器が発見されました。

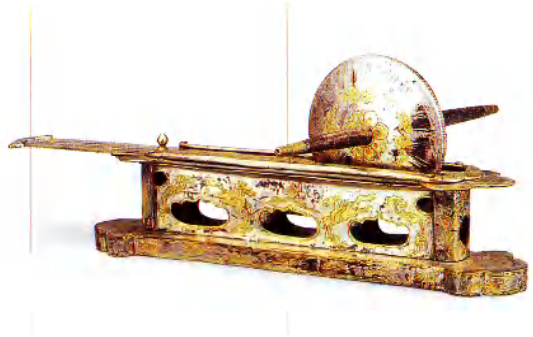


図５　法門寺から発見された茶碾　　図６　法門寺から発見されたガラスの茶碗

韓国や日本の書物に喫茶についての記述が現れるのもこの頃です。韓国の場合は、『三国史記』の「新羅本紀」興徳王三年(824年)の条に「入唐廻使大廉が茶種を持ち帰り地異山に植えた。茶は善徳王(632-646)の時代からあったが、興徳王の時代から盛んになった」と書かれています。

日本の場合は、『日本後紀』弘仁6年の条に「嵯峨天皇が琵琶湖の韓崎に行幸した折に、梵釈寺の大僧正永忠を茶を煎じて、献上した」という記録があります。永忠が中国に渡ったのは775年頃で、ちょうど陸羽が『茶経』を執筆した頃です。したがって、永忠が天皇に献上した茶は団茶であったと思われます。

嵯峨天皇は、各地に茶樹を植えさせましたが、その後、日本は遣唐使を廃止し、中国との公的な交渉を絶ちます。そのために喫茶の習慣も下火になりました。

図７　日本の遣唐使船の図

その後、日本に再び茶をもたらしたのは、臨済宗という禅の大宗派を開いた栄西です。栄西は、1187年に2度目の入宋を果たし、日本に茶樹をもたらします。この時、中国には団茶のほかに、発酵茶がありましたが、栄西の持ち帰ったのは、緑茶であり、抹茶であったと思われます。

２　日本における初期の「茶会」

茶は、僧侶たちだけでなく、新興の武士階級にも受け入れられ、やがて室町時代に入ると、派手な茶会が開かれるようになります。彼らは、中国から将来した絵画や工芸品（唐物）を並べたて、莫大な金銭を賭けて,有名な茶の産地を当てる、闘茶を行いました。

図８　茶をたてる

図９　茶を運ぶ

図10　茶会（前景は盆栽、背景は唐物）

茶会は「茶寄り合い」とよばれ、贅沢な料理や酒も供されるようになりました。

図 11　食事風景

図 12　料理の準備

茶は、次第に普及し、武士や僧侶の間だけではなく、一般庶民の間でも親しまれる飲み物になっていきました。

図14　神社の鳥居前の茶屋

図15　茶屋の細部

当時の法律（建武式目）、物語（太平記）、日記や手紙（観聞御記）、茶書（喫茶往来）などに、茶についての記述が多く見られます。なかでも面白いのが『沙石集』という物語集の中で、牛飼いが僧侶に茶の効用について尋ねる話です。僧侶が「茶には、①眠気覚まし、②消化の促進、③性欲の抑制という3つの効用がある」と答えると、牛飼いは、「夜眠れないと困る、食べ物は少ししかないので、早く消化したくない、性欲が衰えると女房に怒られる」といって、茶は不要だと答えたという笑い話です。

時代が下って、足利義政の時代になると、茶は次第に形式が整えられ、芸能としての地位を確立します。足利義政は、将軍という支配者でありながら、応仁の乱という大きな内乱を放置して、京都を焼け野原にした無能な支配者として知られています。

図16　足利義政

図17　応仁の乱

しかし、その一方では、演劇（能）、建築（銀閣寺）、庭園、華道など、今日「日本文化」と呼ばれるものの大半は、彼の時代に確立したといってもよいでしょう。

図18　能舞台

図19　能面

図20　能衣装

足利義政の祖父にあたる義満は、中国(明)との国交を回復し、中国の名品を輸入し、コレクションしました。彼は、京都に金閣寺を建てたことでも知られます。

図21　足利義満

図22　金閣寺

義政の時代に書かれた『君台観左右帳記』は、足利将軍家がコレクションした中国絵画や中国陶磁器の名品リストであり、飾り付けの指南書（マニュアル）です。そこには、茶の道具を飾り棚に飾る方法が図示されています。

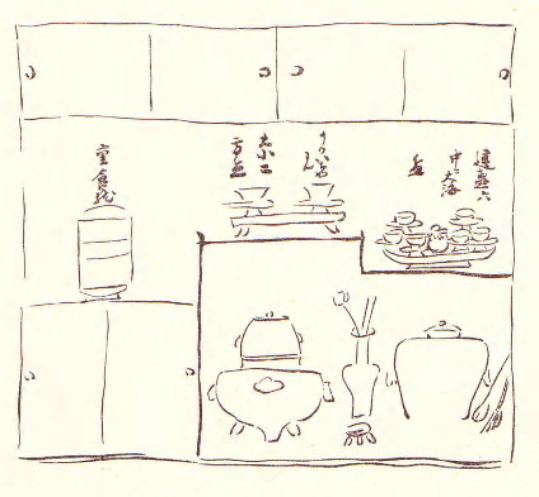


図 23　『君台観左右帳記』の棚飾り

図 24　中国風の棚と茶道具

これらの名品は、今日「東山御物」と呼ばれ珍重されています。

図25　牧渓の軸泉窯子　茶入

図26　龍青磁花生

図27　古銅花生　堆朱合

当時珍重された茶器は、天目茶碗を中心とした中国の茶碗です。

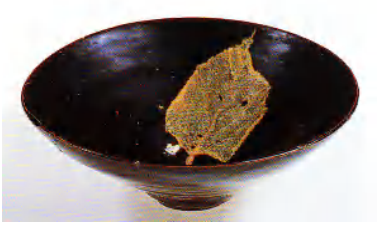


図 28　油滴天目茶碗　　図 29　木葉天目茶碗　図 30　龍泉窯青磁茶碗

これは、義政が割れてしまったのを惜しんで中国に同じものを注文し、中国から「もうこのような名品は出来ないので、修理して返す」といって送り戻されてきたというエピソードを持つ「馬蝗絆」という青磁の茶碗です。

図 31a　馬蝗絆の修理跡　　図 31b　馬蝗絆正面

これらの名品は、1976年に韓国の新安沖の沈没船から発見された遺物と見事に一致します。この沈没船は、室町時代に中国から日本に向かう貿易船でした。ソウルの国立中央博物館には、こうした事情を正確に伝える素晴らしい展示室があります。

図 32　沈没船遺物の龍泉窯茶碗　図 33　沈没船遺物の龍泉窯青磁と『君台観左右帳記』

そこには、茶臼や炭や天目茶碗も遺物として展示されています。

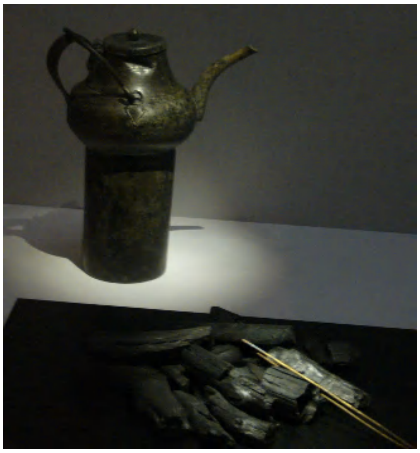


図 34　薬缶と炭と火箸　　図 35　堆朱茶入と天目茶碗　　図 36　茶臼

足利義政は、中国陶磁全盛の茶の黄金時代を演出しましたが、その一方で金閣寺に対応する銀閣寺を建てたように、「侘び」「さび」という日本文化の基本的な性格をよく理解していました。銀閣寺は、金閣寺と比べると大変控えめな美しい建物です。

図37　銀閣寺

図38　銀閣寺庭園

３．村田珠光・武野紹鷗と茶道の始まり

義政の時代に、日本最初の茶人とも言うべき村田珠光が登場します。珠光は、奈良生まれの僧侶と言われていますが、経歴ははっきりしません。彼は「君台観左右記帳」の作者といわれ義政の茶道具のコーディネーターであった能阿弥と親しく、義政の茶道に大きな影響を与えることができたと思われます。

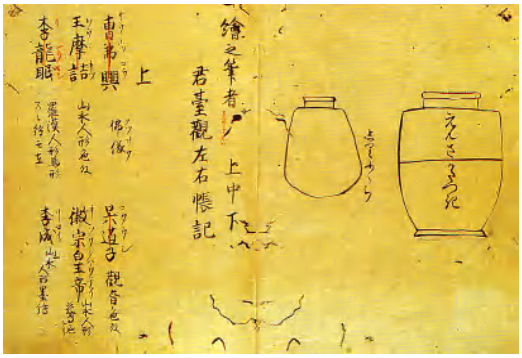


図 39 「君台観左右記帳」の茶入　図 40　東山名物の茶入　図 41　村田珠光(後代)

珠光は、室町時代の人ですから、中国の青磁を茶器として使用しましたが、龍泉窯青磁のような完璧な青磁ではなく、後代の「侘び茶」にふさわしい発色の悪い、歪んだ茶碗のなかから自分が好きな茶碗を選んで「珠光茶碗」として使いました。

図 41　伝世の珠光茶碗

図 42　村田珠光(鉄斎画･19 世紀)

珠光は、また一休宗純という優れた禅僧のもとで修行し、中国の高名な禅僧『碧巌録』の著者である圜悟の墨蹟を与えられています。珠光は、禅と茶道を結びつけ、彼以降、茶席を飾る最高の軸は、禅の法語とされるようになりました。

図 42　一休宗純

図 43　圜悟の墨蹟

村田珠光は、僧籍のひとであったようですが、寺に住むというよりは、奈良、京都のような都市の市中に住み、武士や公家や僧だけでなく、「町衆」と呼ばれた都市の上層市民と交わって暮らしたものと思われます。

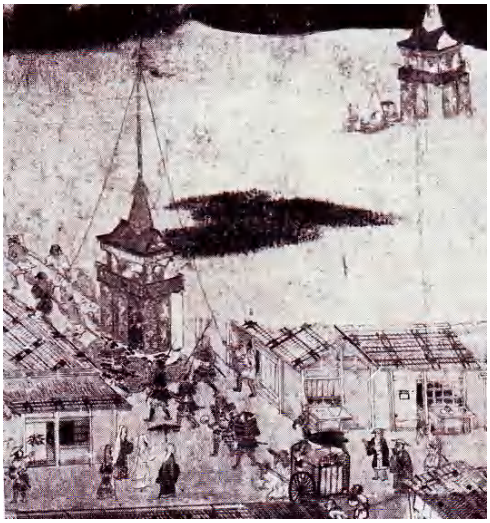


図 44　絵巻に描かれた都市の祭り

図 45　野遊びと茶

そして珠光の次の世代の茶は、明確に都市上層市民（町衆）の主導するものとなりました。その次世代を代表するのが利休の師匠にあたる武野紹鷗です。 武野紹鷗は、堺の豪商で、皮革（つまり武具）を扱っていました。30歳頃までは当時流行した連歌という日本の詩歌の宗匠でした。

図 46　武野紹鷗

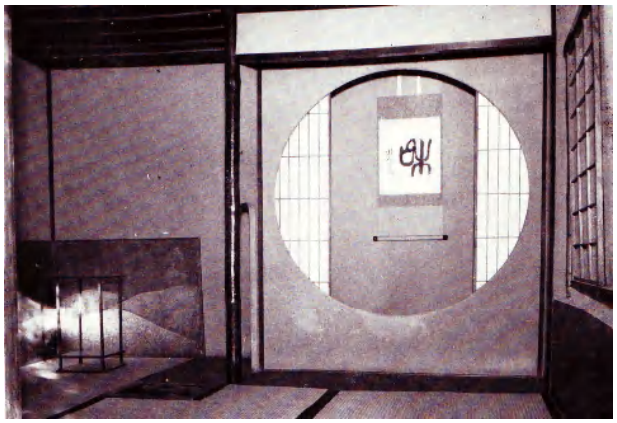


図 47　武野紹鷗の茶室「大黒庵」

堺の町は、京都や大阪と瀬戸内海をつなぐ貿易港で、ポルトガルや中国の外国製品の輸入を独占し、鉄砲をはじめとする武器の製造に携わり、たいへんな富を集めました。堺の商人たちは、覇権を争う武士から距離をとり、いかなる権力からも中立な、商人たちの自治都市を実現しようと試みていたのです。

図 48　ポルトガル商人との交易

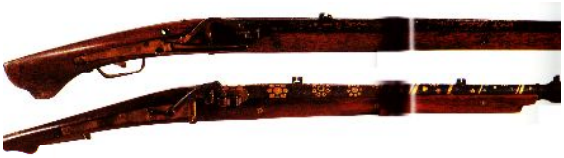


図 49　当時の鉄砲

こうした財力を背景に、武野紹鷗は、室町将軍ほどではありませんが、多くの高価な茶道具をコレクションしました。

図 50　紹鷗旧蔵の白天目茶碗

図 51　紹鷗旧蔵　鶏龍山俵壷

図 52　紹鷗旧蔵茶壷

これは、当時の平和な堺の町の祭礼を描いた屏風です。町は、環濠という堀に囲まれており、祭りの行列が町の門を通って中に入ります。

図 53　堺の祭礼図

図 54　祭礼図(拡大)

町の中には、さまざまの品物を扱う商家があります。商家の裏庭をよく見ると、茶室が設けられているのが分かります。

図55　堺の町

これが、その模型です。商人たちは、「侘び」「さび」といった豊かな自然の中で暮らすことを願い、都市の中にある自分の住宅の中に「市中の山居」としての茶室を設け、人工的な侘びの世界を楽しんだのです。

図 56　堺の商家の復元模型

図 57　茶室

堺の町は経済的に豊かで、鉄砲や弓矢のような武器を作っていましたから、戦争による多くの火災を経験しました。とくに1615年の「大阪夏の陣」という豊臣一族が滅びた戦争の被害は大きく、その焦土層の調査によって、当時の豪商の生活がよく分かります。

図58　1615年焦土層発掘調査

図59　拡大図

これは、堺の町の発掘地図です。この地図の39番という地点からの出土品をみてみましょう。

図 60　堺発掘地図　　図 61　地点 39

そこには、たくさんの茶道具がみられます。茶碗や花入、懐石料理の器の他に、茶釜や茶臼もあります。

図 62　朝鮮王朝茶碗　　図 63　懐石料理器(日本)　　図 64　茶釜

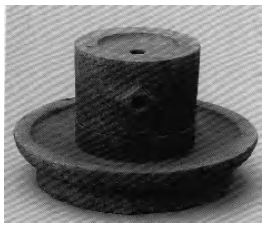


図65　天目茶碗（日本）　図66　織部茶碗　図67　茶臼

組成をみると、1615年の焦土層で圧倒的に多いのは中国陶磁です。それらは、茶に使われるよりも、日常生活の雑器として用いられていたものと思われます。

	土師質土器	瓦質土器	丹波	備前	瀬戸・美濃	唐津	伊万里	中国	朝鮮	その他	合計
第3包含層(17C)	350	18	22	34	8	59	106	94	0	0	691
1615年焼土・焼失面	602	102	45	164	100	218	0	663	9	9	1912
第4包含層(16C後半~末)	1009	153	8	127	63	21	0	318	2	3	1704
第5包含層(16C後半)	174	22	1	21	10	0	0	54	2	1	285

図 68　1615 年焦土層発掘調査組成表

朝鮮王朝の陶磁は、わずか 9 点ですが、いずれも高級品であったはずです。代表的なのが、図 62 の茶碗です。
堺の焦土層からは、ほかにこのような朝鮮王朝の茶碗が出土しています。

図69　堺出土の朝鮮王朝茶碗

京都や大阪をはじめ、多くの戦国時代遺跡から、朝鮮王朝の陶磁が発掘されますが、傾向はほぼ同じです。これは1573年に織田信長によって滅ぼされた朝倉氏の遺跡から発掘された朝鮮王朝陶磁です。

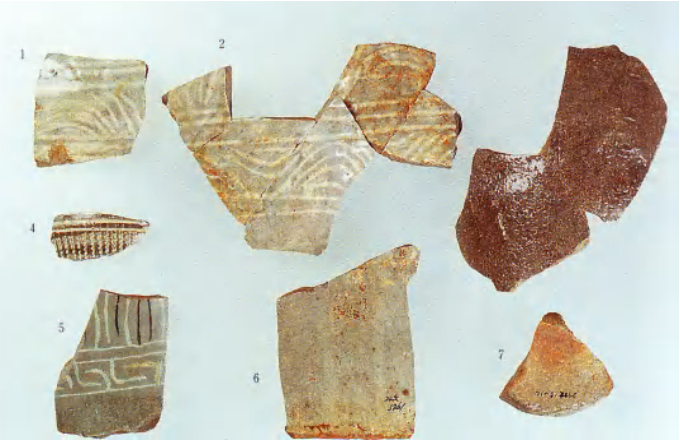


図70　朝倉氏居城遺跡出土陶磁器

室町時代から盛んになった貨幣経済の流れにのって台頭した商人たちが、茶道という文化の力で武士の権力に対抗し、協力関係を築き上げたのだと思います。この関係は、戦前の日本の財閥と政権勢力との関係、戦後の韓国における財閥と政権勢力との関係とよく似ています。

図 71　ポルトガル商人との交易図

図 72　拡大図(背後に茶道具)

4. 千利休の茶道と陶磁器

日本の茶道を確立した千利休もまた、こうした政商の一人でした。利休は、日本を統一した織田信長とその後継者である豊臣秀吉に茶頭として使えましたが、こと茶に関しては、利休は信長と秀吉の師匠でした。

図73　千利休

信長も、秀吉も、茶を政治の道具として使いました。信長は、臣下の武将たちに許可なく茶を行うことを禁じました。そして有名な茶道具をコレクションして、功績のあった武将たちに褒美として下賜したのです。こうして有名な茶道具を所有することが、武将たちのステータスシンボルになりました。これは、織田信長の家臣、柴田勝家が拝領した柴田井戸です

図 74　柴田井戸

信長と秀吉に使え、茶道会のトップになった利休は、村田珠光以来の「侘び」「さび」の茶を理論化し、体系化したのです。利休は、茶道具の価値基準を改め、これまで絶対とされた中国陶磁を遠ざけ、和物茶碗（日本製）と高麗茶碗(朝鮮王朝陶磁)の地位を高めたのです。

図75　茶室

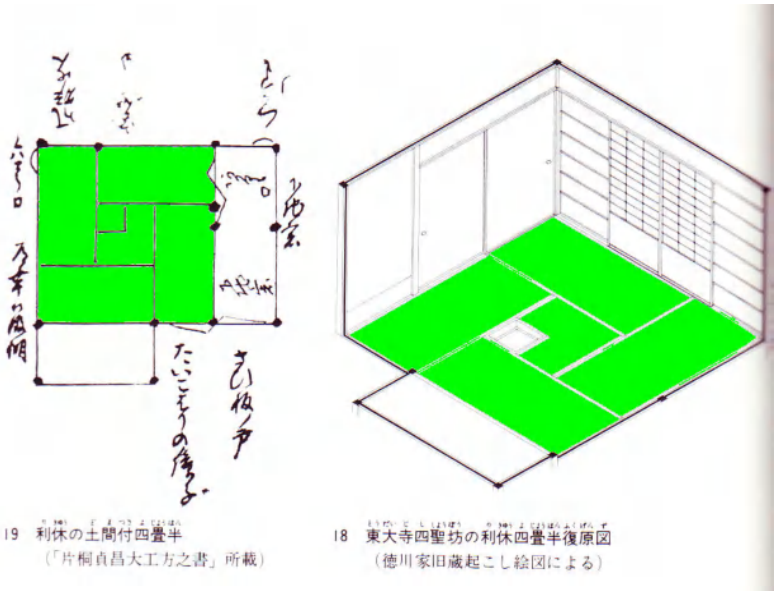


図76　茶室間取り

高麗茶碗のなかで、利休が確実に所持していたのは、象嵌青磁の銘「引木の鞘」です。これは、高麗青磁ですが、15世紀に製作された陶磁器であると考えられています。

図 77　利休旧蔵「引木の鞘」

他には、粉青沙器の銘「二徳三島」があります。これは内部に象嵌があり、外部は刷毛目です。

図 78　粉青沙器茶碗「二徳茶碗」

利休の時代に最も高く評価されていた高麗茶碗は、井戸茶碗です。一番有名なのは銘「喜左衛門」です。井戸茶碗の伝製品は数が多く、分かっているだけでも１５０以上あります。

図79　井戸茶碗「喜左衛門」

粉引茶碗で最も有名なのは、堺を拠点に活躍した武将である三好長慶が所持した銘「三好」です。

図80　粉引茶碗「三好」

図81　三好長慶

利休が所持したと伝えられる斗斗屋と呼ばれる軟質白磁の茶碗も、よく知られています。

図 82　軟質白磁茶碗「斗斗屋」

和物の中で、利休が新しく開発したのは、長次郎の茶碗です。長次郎の出自には不明なところもありますが、彼が韓半島からの渡来人の子孫であることは間違いありません。

図 83　長次郎作の茶碗

5. 利休の後継者・古田織部

豊臣秀吉に利休が死を命じられ、茶道会を去ると、利休の弟子であった古田織部の時代になります。

図 84　古田織部

古田織部は、利休の好んだ長次郎の茶碗と同じく黒い茶碗をデザインしますが、形はさらに歪んで、次第に大胆な模様が加えられていきます。

図85　長次郎茶碗

図86　織部茶碗01

図 87　織部茶碗 02

図 88　織部茶碗 03

織部は、黒の他に、鮮やかな色彩をもつ大胆な陶磁器を作らせ、今日の日本の茶陶の原型を作りました。

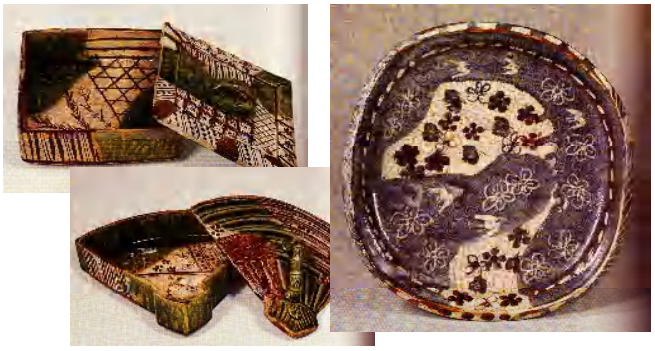


図 89　古田織部好みの茶道具

織部が残した茶碗の中に銘「御所丸」という変わった茶碗があります。これは、織部が韓国の釜山近辺の陶工に注文して作らせた茶碗であると言われています。

図 91　御所丸茶碗

利休の愛用した長次郎の茶碗と比べてみると、その変化と連続がよく分かります。

図 92　長次郎→織部茶碗→御所丸茶碗

この茶碗は大変大きな疑問を残すことになりました。古田織部は、1615年の大坂夏の陣の際に、徳川家康によって死を命じられています。そして壬辰倭乱の後、朝鮮王朝と日本の間で国交が回復されるのは1614年のことです。もしこの茶碗が本当に韓国で焼成されたものだとすれば、おそらく両国の正式な国交回復以前に、既に朝鮮王朝と日本の間に陶磁器を介した民間交流があったということになります。

大きな戦争の直後から商品や技術の交流があったことは信じがたいようにも見えますが、実は同じ大坂夏の陣で焼けた大阪城(1583-1615)の焦土層からは、多くの朝鮮王朝白磁が発見されているのです。

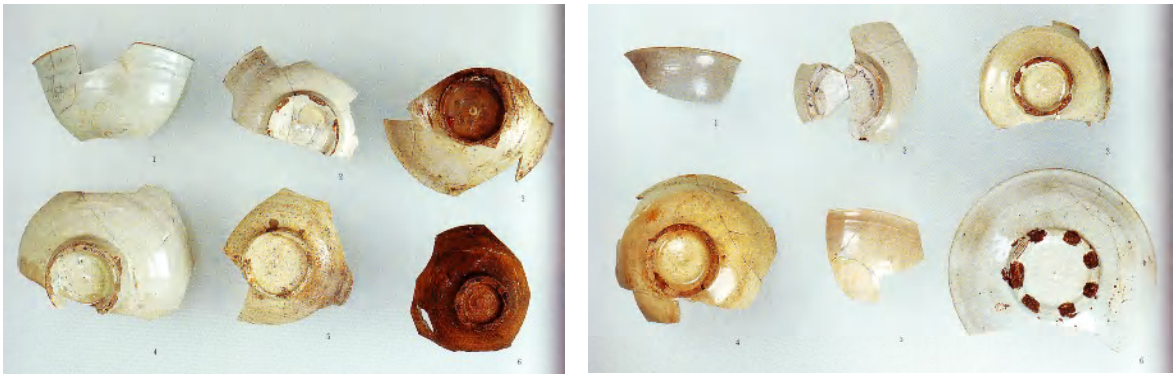


図 93　大阪城遺構出土の朝鮮王朝白磁

6. 江戸時代の朝鮮王朝茶碗

この推論の真偽はともかく、陶磁器は国交回復後の大切な交易品となりました。国交が回復されると、すぐに朝鮮通信使の訳官（通訳）が多くの茶碗を日本に持ち込みました。これは「判事（半使）茶碗」と呼ばれました。

図94　判事（半使）茶碗

日本側も、釜山に開設された倭館に窯を作り、釜山付近の工人を雇って、注文による茶碗を焼成しました。これを「御本茶碗」と言います。

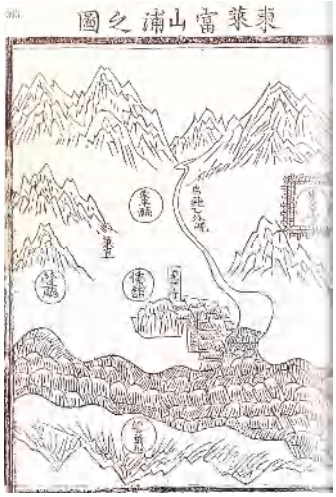
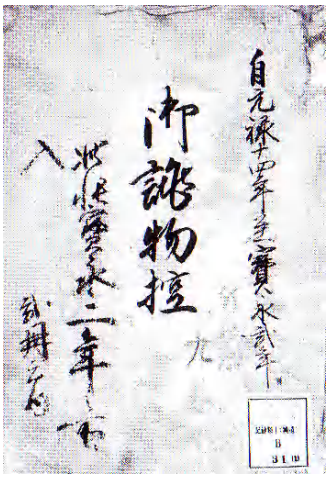
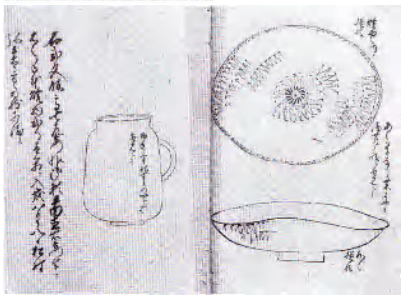


図 95　申叔舟『海道諸国記』(15 世紀初頭)の富山浦倭館　　図 96　御本茶碗

この窯は、1639年から1718年まで、ほぼ80年間続きました。対馬藩には、京都や大坂からの注文を書きとめた「御誂物控」や必要経費を書きとめた「御茶碗焼入目帳」が残されています。





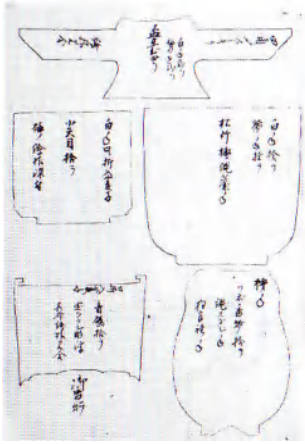


図 97　対馬藩資料と注文茶碗「御本茶碗」

この時代の茶道を主導したのは、小堀遠州でした。彼は、京都の仁清を中心とした京焼を茶道具として使い、いわゆる「きれい寂び」という美しく華やかな器を茶道の中心として置きました。

図 98　小堀遠州と仁清の色絵茶道具

この仁清の用いた「色絵」とい手法は、実は粉引や刷毛目の技法の応用です。濃く発色する胎土に白土を掛け、その上に鮮やかな色彩の絵を描き、さらに透明釉を掛けたのです。

図 99　粉引茶碗と仁清の色絵茶碗

遠州の主導した「きれい寂び」の影響で、この時代に移入された朝鮮王朝茶碗には、全般に華奢で、利休や織部の時代のような力強さがないように思われます。

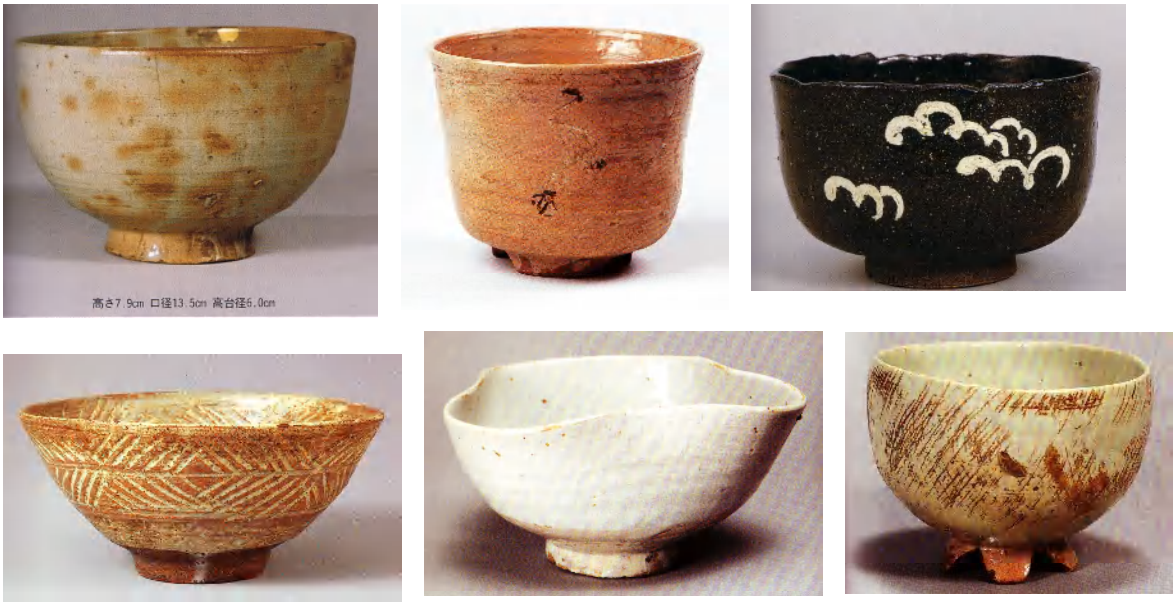


図 100　江戸時代の朝鮮王朝茶碗「御本茶碗」

7　寶城粉引について

最後に、今回のシンポジウムの中心テーマである粉引について考えてみましょう。最近の研究によれば、日本に歴史的に伝えられた朝鮮王朝の名品茶碗は664あります。そのうちの27が粉引茶碗です。刷毛目が28ありますから、合わせれば55で、かなりの数になります。

図 101　粉引茶碗「松平」

図 102　粉引茶碗「楚白」

粉引がどこで作成されたかは、長い間、特定されませんでしたが、1990年代に高興郡の雲堡里で粉引を焼成した窯址が多数発見されました。そこで日本の学界では、粉引は雲堡里で焼成されたというのが通説になりつつあります。しかし宋基珍先生の努力で、宝城にも2箇所の重要な窯址があることが発見されました。寶城の窯址は、雲堡里に勝るとも劣らない重要な窯址です。

図103　宝城郡道村里窯址

日本の古美術の世界では、1990年代まで、専門家の多くは「粉引は寶城」と考えていたのです。それは、おそらく浅川伯教の影響だと思います。
浅川伯教は、1945年の光復まで、韓半島の全域を歩いて窯址の調査を行いました。浅川伯教は、柳宗悦や弟の浅川巧とともに、民間から寄付をつのり、1924年に慶福宮緝敬堂内に朝鮮民族美術館を開館しました。この美術館は、後の韓国国立民俗博物館や日本民藝館の原型になったと考えられます。図104は、開館された美術館の内部です。小規模ながら、現在の国立民俗博物館の展示を思わせます。図105は、開館準備のためにソウル市内で開かれた展覧会で、前列中央が柳宗悦、左端が浅川伯教です。

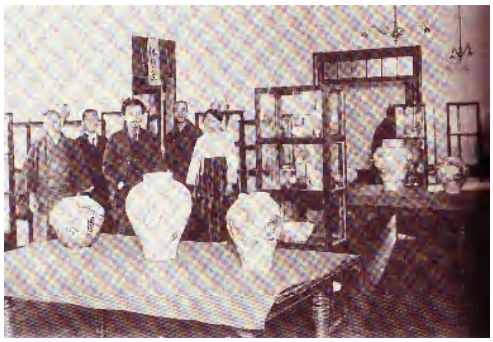


図 104　浅川伯教　　図 104　朝鮮民族美術館内部　　図 105 朝鮮民族美術館主催展覧会

光復後も、アメリカ軍の許可の下に韓国に残り、窯址で表面採取した陶片を整理し、韓国に残しました。その資料の大部分は国立中央博物館に収蔵されているはずです。私は、浅川の資料を直接に確認することはできませんが、きっと彼の資料の中に寶城で採集した粉引の陶片があったと思います。彼は、戦後、朝鮮王朝陶磁について論文を発表していますが、そこには粉引の産地は寶城であると明記されています。たとえば1956年刊行の『世界陶磁全集』(河出書房)のなかで、図106の粉引茶碗について「朝鮮人は初め白いので喜んでも、次第に不快なしみが出て来るため、このような制作方法短い期間行われたのみで止み、粉引の時代は短かった。日本の茶人は茶うつりが良いといって、これを珍重する。茶人特有の鑑賞法である。李朝前期、全羅南道宝城の産。」と書いています。今日の研究成果からすると不十分な点もありますが、当時としては驚くほど正確な記述であると考えられます。

図106　粉引茶碗

粉引は、茶道具として、茶碗以外にも、大変に高い評価を受けています。特に珍重されるのが、懐石料理の酒器や花入れとしての壷です。

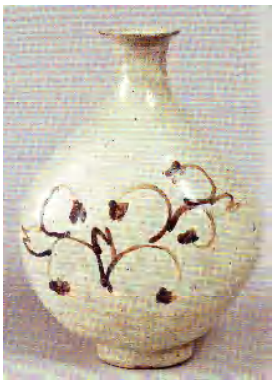


図107　懐石料理の酒器として珍重される粉引

他に、鉢や耳盃を初めとする祭器もあります。これらの器も、懐石料理の食器や花生に転用され、高く評価されています。

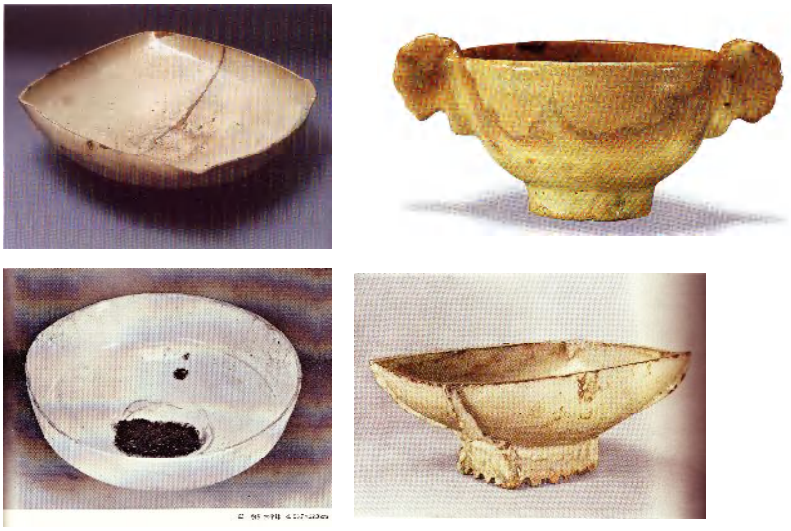


図 107　粉引の器さまざま

日本では、伝統的な粉引の焼成技術を利用して、私たちの日常生活に使用される器が、現在でも多く製作されています。これは私が使用している日本の友人の作品です。

図 108　現在の日本人陶芸家による粉引作品

宝城で、宝城の白土や釉薬を使って焼いた宋基珍さんの作品も立派なものです。

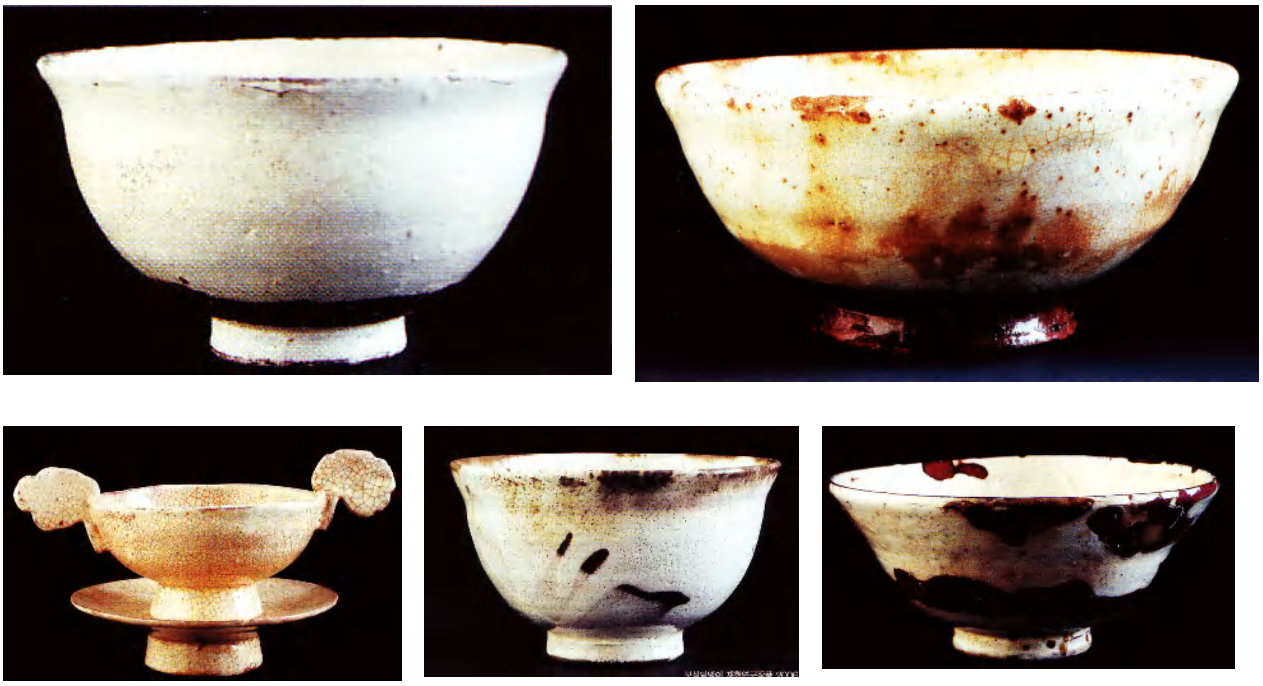


図 109　宝城在住陶芸家・宋基珍の粉引作品

私は、今回のシンポジウムが一つの契機になって、寶城郡の窯址調査が進展し、「寶城が粉引の名品の生まれた土地であること」が明らかになることを期待しています。

図 110　道村里窯址と地表に現われた陶片